

戦争のトラウマ体験がその後の人生に及ぼす影響

—テキストマイニングを用いて—

中野真希（明治学院大学大学院）

1 問題

本研究では、“戦争が終わったとしても、体験者の心の中では今もなお戦争が続いているのではないか”という問題意識を根底に持ちながら進めていく。実際、日本において戦時中における元兵士や市民の証言、戦後に PTSD 症状が出現したという報告は数多く存在する。今年で終戦から 65 年が経ち、戦争体験者の高齢化が進み、体験を継承する動きも見られるようになった。戦時中の出来事に焦点を当てた元兵士や市民による証言は、文献や論文などで数多く残されている。例えば、NHK「戦争証言」プロジェクト（2009）では、数多くの元兵士が戦時中の出来事や戦後の生活などについて語っており、NHK は戦争を継承すべくシリーズ本として体系的にまとめている。

戦後については、戦争体験者が再体験、麻痺・回避、過覚醒という PTSD 症状が出現したという症例も存在する。例えば、末田（2007）はシベリア抑留体験のある 80 歳代のアルコール多飲の男性を症例に研究発表し、「他者の生命を奪ったが故、戦争の加害者として病んだ日本人患者像を浮き彫りにした」と述べている。また、村本（2008）による「戦地から帰ってきた父親は、毎晩のように悪夢にうなされていた」という再体験に関する報告もある。Kerr（2001）や長田（1998）は、戦争のトラウマ体験の後、家族と絆を結ばずに仕事に過剰な関心を向け、日本が経済復興を遂げたのは過覚醒によるものではないかと述べている。米国では、MacNair（2002）はベトナム帰還兵の PTSD を調べ、加害体験者が非加害体験者よりも強い PTSD を持っていることを示している。

以上のように、戦時中における元兵士や市民による証言や戦後に PTSD 症状が出現したという報告は数多くある。しかし、戦争が体験者のその後の人生にどのような影響を及ぼしたのか、トラウマ体験に焦点を当て、その回復過程を家族関係やソーシャルサポートの視点から日本で研究されたものは少ない。

そこで本研究では、戦争のトラウマ体験がその後の人生に及ぼす影響について明らかにする。戦争体験に関する証言記録をもとに、戦争体験によって生じた PTSD 症状が人生にどのような影響を及ぼしたのか、その要因を探る。

2 目的

戦争のトラウマ体験がその後の人生に及ぼす影響について、特にその回復過程に焦点を当てて明らかにする。戦争体験に関する証言記録をもとに、戦争体験によって生じた再体験、麻痺・回避、過覚醒という PTSD 症状が人生にどのような影響を及ぼしたのか、その要因を探る。

3 方法

NHK の「戦争証言プロジェクト」による「戦争証言アーカイブス」(<http://www.nhk.or.jp/shogenarchives/>)が 2009 年の 8 月から 10 月にかけて開設されていた。このサイトから地上戦を戦った 72 名（15 部隊）分の戦争体験者の証言記録をテキスト化した。そのテキストを Text Mining Studio Ver. 3.2（数理システム社）を用いて分析した。テキストマイニングによる分析は、文中に現れる単語から戦後における辛い体験や悩んだ出来事、家族や戦友の存在などに関連するものを（1）基本情報、（2）単語頻度解析、（3）注目分析、（4）原文参照により

調べた。

4 結果と考察

4-1 基本情報

テキストの基本的な情報を表1に示した。表1によれば、総行数（パラグラフ数）は4225行であり、平均行数の長さを文字数で数えた平均値すなわち1パラグラフあたりの平均文字数は76.1文字であった。総文数は21596文で、平均文数の長さを文字数で数えた平均値は14.9であった。述べ単語数は129530単語で1サンプルあたり30.7単語であった。単語種別数は14594であった。

表1. 基本情報

項目	値
総行数	4225
平均行長(文字数)	76.1
述べ単語数	129530
総文数	21596
平均文長(文字数)	14.9
単語種別数	14594

4-2 単語頻度解析

単語頻度解析とは、テキストに出現する単語の出現回数をカウントする分析である。品詞は動詞・名詞・形容詞などがあるが、本研究では形容詞をカウントした。なぜなら、形容詞は感情が現れやすいからである。面接者による質問と元兵士の経歴を除いた単語頻度解析を合計で見ると、「良い」「早い」「悪い」が多かった。それ以降の「凄い」「ひどい」「恐い」などの感情に関する単語も多く出現していることが分かった。

表2. 単語頻度解析

単語	品詞	頻度
良い	形容詞	282
早い	形容詞	118
悪い	形容詞	105
多い	形容詞	95
大きい	形容詞	91
凄い	形容詞	89
ひどい	形容詞	57
可笑しい	形容詞	53
恐い	形容詞	53
エライ	形容詞	50

例えば、「可笑しい」という感情について原文参照機能を使って調べた。「可笑しい」の中には、戦後について語られたり自分が自分であることに違和感を抱いたりするという記述が多かった。原文参照により、一部を引用

した。

- ・ 体力的にも精神的にも、とてもじゃないが、もたん。だから結局、暑さにやられ、病気にやられ、神経的にやられて**おかしいんですな**。ですからまともでないというのは、人間並みにものをよう考えんようになって。考えることができんようになってというんですわな。
- ・ だからこうやってやね、おおまかなことは日にちまで覚えとんじゃ。頭こびりついとんじゃそれ。日常生活のことやあんだ、この頃はね、今したこと今忘れるんじゃ、そのぐらいもう頭がボケてしもてやね、脳が**おかしくなるとるよ**。それがやね、そんな脳みそがやね、この戦争のことについてはね、おおまかなことやったらね、おおまかな移動であつたらいまだにやね、全部頭に、スッとドドッと出てくるよ。そのぐらい強烈な印象があるんじゃ。
- ・ ひとりっきりは朝、目が覚める。「あれ。まだ生きてるな」って、それは何十回とありましたね。だから、もう自分で、当然もう帰って来ないというには腹で決まっていたんだ。朝起きてみて、「あれ。なんだ生きてるんだ」って、自分で。そんなこというと、**おかしくなるけど**。それが今もたまにある。

単語頻度解析では、感情が現れやすい形容詞をカウントした。そこから戦後について語られたり自分が自分であることに違和感を抱いたりするという記述が多かった「可笑しい」という形容詞に注目し、原文参照機能を使った。元兵士は今現在の自分自身を「すぐに忘れる。それぐらい頭がボケてしまった」。しかし、「戦争のことだったら、全部頭にスッとドドッと出てくる。それくらい強烈な印象がある」と語っている。それほど戦争体験は強烈であり、何年何十年経過しても忘れられない出来事として記憶にあり続けていると考えられる。

4-3 注目分析と原文参照

注目分析とは、注目したある単語について分析することである。

注目語を「戦後」「家族」「戦友」「罪」とし、係り受けの上位を見た。以下の図にある●の大きさは単語の出現頻度を表わし、線の太さは係り受けの量を表わしている。

また、戦後の生活や自身の感情について語られたものに着目し、注目語ごとに原文参照を行い、具体的な語りの例を引用することにより、戦争体験がその後の人生に対する影響がどのようなものであるかについて考察した。

4-3-1 「戦後」について

注目語を「戦後」とし、元兵士が戦後の生活や自身の感情について語られたことに着目した。図1の右側は戦後の感情について語ったこと、左側は戦後に、戦時中の出来事を振り返ったことである。右側では、周囲に対して“あきらめる+ない”や戦友に対して“生かす+したい”などということが語られている。“あきらめる+ない”では、「周囲には戦争での経験を話さない。話されても喜ばないし」と言い、あきらめの感情が窺える。“生かす+したい”では、「自分は生きさしてもらっている。死んだ者のために一生懸命生きなければならない」「無駄な戦争をした。今生きている者として、とても忍びない」と、今の命は戦友たちがいたからこそあるのだと言い、生きさしてもらっていると語っている。周囲に何を言っても伝わらないかもしれないというあきらめの気持ちを抱きつつ、命の大切さやありがたさを痛感していると考えられる。他者にそのような経験や思いを語る時、一体どのような気持ちになっているのか、様々な葛藤を抱いているだろうと考えられる。また、戦後は戦友という存在を少しでも生かしたいと思い、自衛隊の育成に力を注いだという。「この活動が戦友に対する報いであり、私はずっとレイテで生きている」証だと語っている。元兵士は報いることこそが生きる糧になっている可能性もあると考えられる。

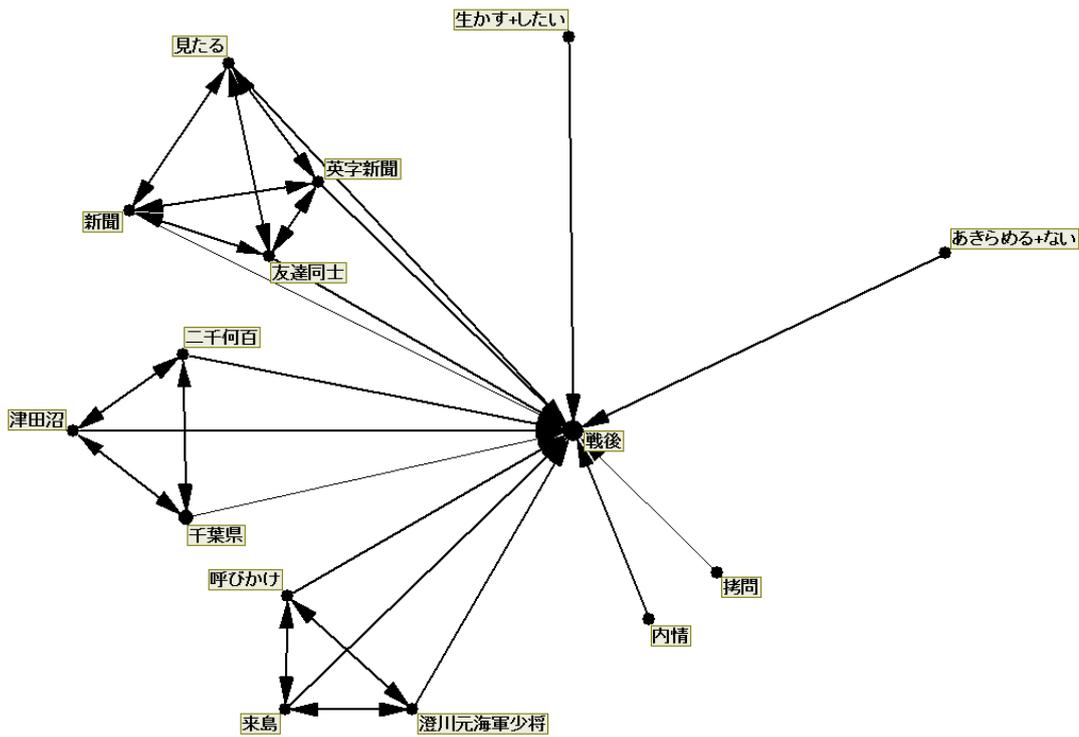


図1 「戦後」に関する注目分析

以下に「戦後」に関連する言説の例を原文参照により示す。

- ・ **終戦後**、帰ってもわしは話、しません。そういうふうなことをあのうどういふんですかな、いうて喜ぶものでもないし、自分も好んでしたもんでないじゃからな、ほじゃけん、わしはもうそういう話はせんので。ほやけど、わしが持っていったこめでな、息をながらえてくれた兵隊もな、そりゃあ相当あると思う。それがもうわしのこう慰めの気持ちじゃな。
- ・ それから、**終戦後**生きさしてもろうとるから、できるだけその社会のため国のために尽くさにゃいけんなど、死んだものの代わりぐらい一生懸命やらにゃいけんないうふうな気持ちも確かに持ってありましたな。
- ・ 人間の運というのはね、ほんと紙一重ってことばよくありますけど。そうです。だから最後まであきらめないで、まあわたしはそれから**戦後**いろいろの病気もしましたしね、手術もしましたけどね、人間はやっぱりね、頑張れば何とかなるんだという気持ち。これはありがたいと思います。
- ・ 実は、わたしはおやじの代からのキリスト教なんです。**終戦後**、帰ってきて、1回も教会へ行かないんですよ。なぜ行かないかという、わたしは死んだ連中が靖国神社、あるいは静岡の護国神社、あそこに祭られているので、それらのことを思うとね。靖国神社へ行くのは反対だという教会の連中が言う、それは言ってもいいけれども、もうちょっと思慮のある言い方がないのかと。靖国神社へ行くな、あれは無駄な戦争をしたと、無駄な戦争にしたのじゃ、こっちはたまらないし、いま生きている者として、当時彼らと一緒に飯を食った、それがいま生きている者として、お前たち、無駄に飯を食っていた、無駄なことをしたと言うのには、とてもしのびないですよ。
- ・ だから、レイテで戦った兵隊さんたちの思いを少しでも生かしたいと思って、**戦後**はもっぱら僕は自衛隊の教育。防衛大学校作るときも、育成からお世話をしてやってきてるわけですね。とにかく一生懸命やって、たくさん命をかけて、レイテで戦った人になんとか報いないかんっていうことで、そのためにまた後輩に教

うせ、やけくそになってるからもう、どっかに逃げようかなあとも思っていたんだよね。しかし、家族がいるからそうもできないでしょう。そんなことを考えて今まで生きてきたんだよ。

以上のように、元兵士は家族に戦争体験を「言えない」という思いを抱きながら、家族のために「気持ちを切り替えて働き」「家族がいるから逃げもしなかった」。家族の存在が現実の世界へ引き戻したのかもしれない。しかし、家族の存在が救いとなったのかどうかは明らかにされなかった。

4-3-3 「戦友」について

次に注目語を「戦友」とし、元兵士が戦友について語られたことに着目した。図3の右側は戦後に戦友に関する思いを語ったこと、左側は戦時中に戦友に関する思いを語ったことである。戦友に対して、「我々は同志であり、皆本当に一生懸命にやって青春をなくした。亡き戦友を思うのはそれだけ」と言い、戦友会に対しても「だいぶ後になって話したけど、おお、そうだよなあ」と共感する部分があったと言及している。亡き戦友に対して思う気持ちを共感し合える場所は、元兵士にとって救いになるのかもしれない。周囲にはあきらめの気持ちを抱くこともあるが、しかし、そのぶん戦友会の存在は大きいと考えられる（吉田、2009）。

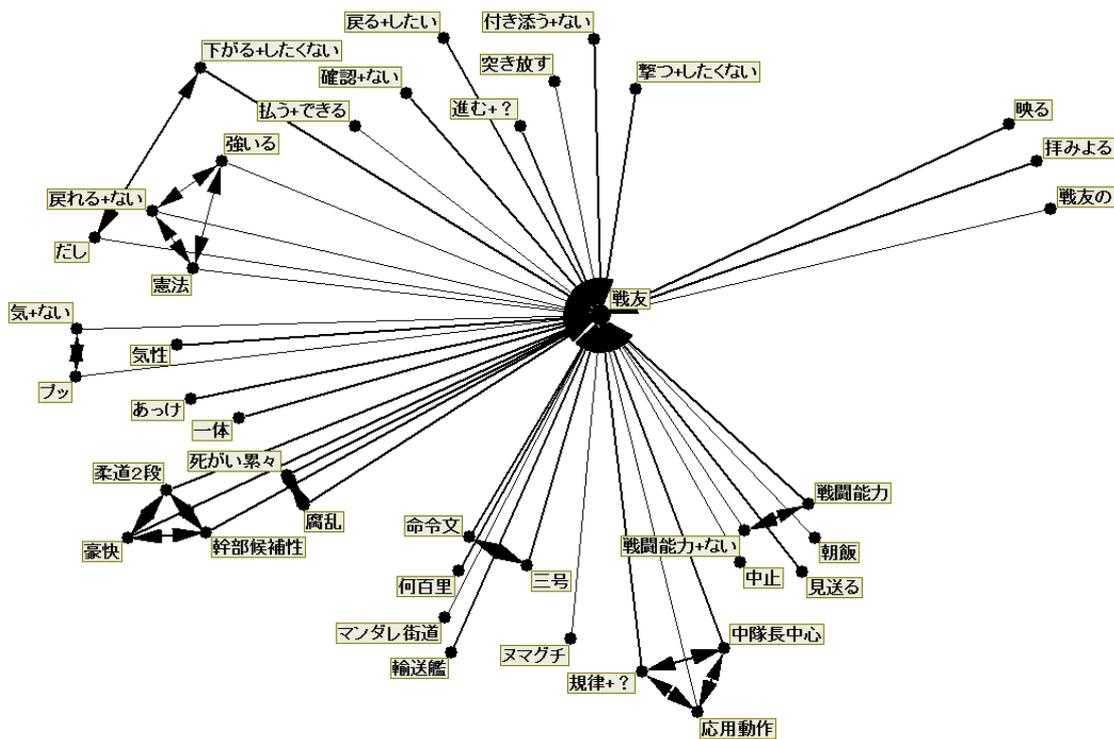


図3 「戦友」に関する注目分析

「家族」と「戦友」の注目語を比較してみると、明らかに「戦友」について言及している単語が多い。戦友とは同じ戦場を生きた、または生き延びた“同志”であり、経験や思いを共感し合える存在なのかもしれない。そして、亡き戦友に対しては、報いながら生きさせてもらっている、だからこそ今ある命を繋がないと感しているのかもしれない。

また、「亡き戦友が苦しんでいる死に様、情景は脳裏にある。二度とそういう場所には行きたくない」と言い、60年以上経った今も記憶にあり、苦しんでいると考えられる。

以下に「戦友」についての語りの例を原文参照により示す。

- ・ **戦友**、本当にね、考えられんようなね、いい、元気な人がたった1発の弾に当たって亡くなるわけですからね、本当に。まあ、戦争だけはしちゃいかんと思いますね。
- ・ 向こうも見とる、全部見とるっていうわけさ、ついて歩いて。お前の行動、全部見とるからなって言うわけさね。そして、それを今度、**戦友会**に行っ、だいぶあとになるけど話したら、おお、そうよなあって言うて。
- ・ **戦友**たちの苦しんでいる死に様を見て帰ってきた**戦友**たちは、いったん後方に下がってもその情景はいつでもまぶたというか、脳裏にあるんで、二度とそういう場所に行きたくないというのがあったらしかたないですね。
- ・ 今の若いもんに言わせると、戦争した者がばかなんだと。そう言われれば、負けたからばかだったかもわからんけど、今の若い人たちが何を言おうが、われわれ同士はご苦労だったと。みんな本当に一生懸命やって、青春をなくした。亡き**戦友**を思うのは、ただそれだけだね。

以上のように、元兵士は戦友に対して「同志である」と語り、注目語の比較でも家族の存在より戦友に関する言及が多かった。また、戦友会も共感できる場だと語っている。戦友や戦友会の存在は、元兵士にとって経験や思いを共感し合えると考えられる。

4-3-4 「罪悪感」について

次に注目語を「罪悪感」とし、元兵士が罪悪感について語られたことに着目した。図4の右側は罪悪感がある場合、左側はない場合についてである。「何の罪のない者を殺害する時の悲鳴は耳から離れない」と言い、「やむを得なくてそうするかもしれないが、かわいそうで」「戦争は暴力で、人の生命を軽視している。命の尊厳を知らない」と一貫して「戦争だけはしちゃいけない」と語っている。それは、根底には“人を殺めたかもしれない、生き残ってしまい戦友に申し訳ない”という罪悪感からくると考えられる。

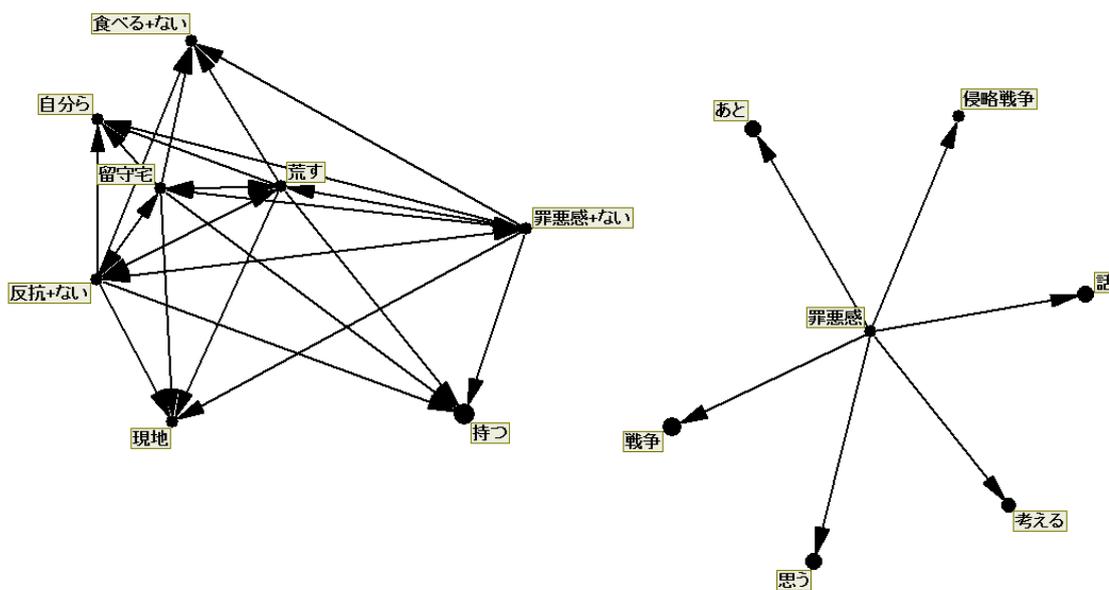


図4 「罪悪感」に関する注目分析

以下に「罪悪感」に関連する語りの例を原文参照により示す。

- ・ いやあ、人をね、殺害するというのは。あの、悲鳴ね。本当に耳から離れませんよ。かわいそうで。何の**罪もない者**を上から処分せよという命令が来るでしょう。放してやるわけにもいかないし、放してやれば、もし敵に行ったらね、敵にわれわれがおる場所もわかるし、どのぐらいの兵力もわかるし、それはもう本当にやむをえなくそうした処置をとるんだろうけどもね。本当にそうされる者がかわいそうですよ、またね。だから、まあそういうことだけ避けていただければありがたいなと思って。
- ・ 戦争ちゅうのは暴力であり、無辜の人間を殺害して罪をつくる一方だから。人の生命を軽視してるもんね、戦争ちゅうのは。命の尊厳っていうことを知らないんだよ。今の人間はそうなりつつあるよ。自分さえいければよっていうような考えの人たちが多いもんね。本当に若い人たちそうだね。恐ろしい時代だと思うよ。
- ・ 行くところまで行ったなあという感じですねえ、はっきり言うて。それがいいとか悪いとかいう感覚はないですなあ。と思います。

以上のように、元兵士は「戦争だけはしてはいけない」と言い、その気持ちは“人を殺めたかもしれない、生き残ってしまい戦友に申し訳ない”という罪悪感からくると考えられる。

5 総合的考察

5-1 本研究での分析のまとめ

本研究では、戦争のトラウマ体験がその後の人生に及ぼす影響について、特にその回復過程に焦点を当てて明らかにした。戦争体験に関する証言記録をもとに、戦争体験によって生じた再体験、麻痺・回避、過覚醒というPTSD症状が人生にどのような影響を及ぼしたのか、その要因を探った。分析としてテキストマイニングを用い、文中に現れる単語から戦後における辛い体験や悩んだ出来事、家族や戦友の存在などに関連するものを(1)基本情報、(2)単語頻度解析、(3)注目分析と原文参照により調べた。

単語頻度解析では、感情が現れやすい形容詞をカウントし、特に「可笑しい」という単語に注目した。そこでは、戦後について語られたり自分が自分であることに違和感を抱いたりするという記述が多かった。元兵士は今現在の自分自身を「すぐに忘れる。それぐらい頭がボケてしまった」。しかし、「戦争のことだったら、全部頭にスッとドドッと出てくる。それくらい強烈な印象がある」と語っている。それほど戦争体験は強烈であり、何年何十年経過しても忘れられない出来事として記憶にあり続けていると考えられる。

注目分析と原文参照では、注目語を「戦後」「家族」「戦友」「罪悪感」とし、係り受けの上位を見た。「戦後」について、元兵士は周囲の人々に「何を語っても分かってもらえないのかもしれない」というあきらめの気持ちを抱きながら、命の尊さを痛感していたと考えられる。それは、戦友の死を目の当たりにし、「無駄な戦争をした。しのびない」という思いがあったからである。その報いとして、「戦後は自衛隊の教育や育成をしながら、亡き戦友とレイテでずっと一緒に生きている」と考えられる。「家族」について、元兵士は戦争体験を「言えない」という思いを抱きながら、家族のために「気持ちを切り替えて働き」「家族がいるから逃げもしなかった」。家族の存在が現実の世界へ引き戻したのかもしれないが、それが救いだったのかどうかは明らかにされなかった。「戦友」について、元兵士は「同志である」と語り、注目語の比較でも家族の存在より戦友に関する言及が多かった。また、戦友会も共感できる場だと語っている。戦友や戦友会の存在は、元兵士にとって経験や思いを共感

し合えるのかもしれない。「罪悪感」について、元兵士は一貫して「戦争だけはしてはいけない」と言い、それは“人を殺めたかもしれない、生き残ってしまい戦友に申し訳ない”という罪悪感からくると考えられる。

5-2 先行研究との比較

中野（準備中）は、戦争体験者にインタビューを行い、戦争体験とくに加害体験について、(1) 戦後、日本に戻って来てからも忘れることはできず、夢に出てくることも多々あったこと、(2) 戦争を体験し、戦後も生きる糧になったのは戦友の存在だったということを明らかにした。

末田（2007）は、シベリア抑留経験のある80歳代の元陸軍兵士の男性を症例に、複雑性外傷後ストレス障害（complex PTSD）についての事例研究を行なった。この患者は当初、「戦場では人を殺してもないし、死体も見たことがない」と断言していたが、診察を重ねるうちに「死体を見たことがある」「もしかしたら自分が撃った流れ弾が当たったのかもしれない」「一度だけ（銃剣で）突いたことがある」と話し出した。この症例では、戦争での加害行為における罪悪感が長年のアルコール多飲や幻視・幻聴に影響を及ぼしたと考えられる。末田（2007）は「戦争の加害者として病んだ日本人患者像」を描き出したのである。

本研究はテキストマイニングによる分析を通して、この様な症状をもたらすマイナスの体験の基づく懊悩が、たとえ戦争が終わったとしても心の中では続いており、今も罪悪感や戦争の記憶に苦しんでいるということを明らかにした。

5-3 臨床心理学への示唆

本研究で得られた知見は、(1) 加害経験がその後の人生に何かしらの影響を及ぼしていること、(2) そのような体験はなかなか口に出せないこと、(3) しかし、戦後64年近くの時点ではそのような抵抗感を乗り越えて証言し、自身の体験を戦争体験のない人々への教訓とするために活かして欲しいと望んでいることなど、戦争体験が本人の人生にとって重要な意味を持つこと、(4) 亡き戦友のために自分は人生を楽しむべきではなく、報いるために存在しているということ、これらの生きる姿勢を知ることは、戦争体験がある高齢者のカウンセリングや心理的なケア全般において配慮すべき点であると思う。

今回の研究から、戦争を経験した元兵士は、戦友や戦友会の存在が家族と同等もしくはそれ以上に大きかったのではないかということが分かった。そして、それが「生き残ってしまい戦友に申し訳ない」という罪悪感に繋がったのではないかと考えられる。この様な罪悪感は臨床心理学的には、サバイバーズ・ギルトと呼ばれ（金、2006）、戦争や事件、事故などに遭い生還を遂げた人が助からなかった人に対して抱く罪悪感のことである。本田（2007）は、NY同時多発テロで生き残ってしまったことに対して抱く罪悪感を次のように述べている。同僚は死亡したが自分が生き残ってしまったことは、被災者としての急性ストレス症状に加え、生き残ったことへの罪悪感に苦しみながらも、それらの感情を押し殺して過覚醒状態で仕事をしなければならない日々が続いたという。すなわち、同僚や戦友は同志であり、そのような人物を亡くすことはストレス症状にさらされることである。不眠、苛立ち、乖離などの症状も現れ（本田、2007）、これは中野（準備中）が元兵士に行ったインタビューで「戦後数年、夢ではなく自分は起きているのに人を殺す場面を見た」という乖離症状と合致すると考えられる。また、本田（2007）は生存者は過覚醒状態で仕事をしなければならなかったと述べているが、これはKerr（2001）や長田（1998）のいう戦争のトラウマ体験の後、家族と絆を結ばずに仕事に過剰な関心を向け、日本が経済復興を遂げたのは過覚醒によるものではないかという記述と合致すると考えられる。以上のように、戦争や事件、事故に遭い生き残った者は、亡き戦友や同僚に申し訳ないという罪悪感を抱き、またその反動として過覚醒状態などのストレス症状にさらされるということが分かった。

5-4 本研究の限界と今後の課題

本研究の限界は、第1に、分析対象の問題として、ウェブサイト上での語りはNHKの編集を経た「証言」であり、おそらくは実際の語りの一部分であることがある。語りに、NHKの取捨選択が働いているという限界がある。第2に、本研究では陸軍兵士のみを対象を限っているため、従軍看護婦や海軍兵士、飛行機乗りなど、地上戦の兵士でない証言をデータとして取り込んでおらず、これらを分析対象に含めた場合はまた異なった結果が得られる可能性もある。とはいえ、戦争証言を戦後の生き方とトラウマという観点から、テキストマイニング分析によりその特徴を明らかにすることができた意義は大きいと考える。

今年で終戦から65年が経ち、戦争体験者の高齢化が進むが、このように語り継いでくれた貴重な内容を継承できるよう、更なる研究を進めていきたい。

【謝辞】

データの収集からテキストマイニングの分析方法までご指導を下さった和光大学の伊藤武彦先生に感謝致します。誠にありがとうございました。また、Text Mining Studioを使用させて頂いた数理システム社に感謝致します。

【引用・参考文献】

Kerr, A. (2001). *Dogs and demons: Tales from the dark side of Japan*. Hill & Wang

飛鳥井望 (2007). PTSDとトラウマのすべてがわかる本 講談社

Shephard, B. (2001). *A War of Nerves: Soldiers and Psychiatrists in the Twentieth Century* Harvard University Press

ヴァン・デア・コルク, B.A., マクファーレン, A. C., & ウェイゼス, R. (編 1996)・西澤哲 (訳) (2001). *トラウマティック・ストレス—PTSD およびトラウマ反応の臨床と研究のすべて* 誠信書房

ハーマン, J. 中井久夫 (訳) (1999). *心的外傷と回復* みすず書房

森茂起・兼子一・人見佐知子・藤原雪絵・久留嶋祥吾 *子ども時代の戦争体験に関する研究 第1報 第2報* 未公刊

村本邦子 (2008). 家族を通じて受け継ぐもの *女性ライフサイクル研究*, 18, 8-15.

長田由紀子 (1998). 高齢者の戦争体験の人生における意味と老年期の適応に関する研究 平成7年度-平成9年度科学研究費補助金(基盤研究(C))研究成果報告書

中野真希(準備中) 戦争のトラウマ体験がその後の人生に及ぼす影響—回復過程に焦点を当てて— 明治学院大学大学院心理学研究科臨床心理学コース 提出予定論文

NHK「戦争証言プロジェクト」2009「戦争証言アーカイブス」<http://www.nhk.or.jp/shogenarchives/> (2009年10月2日取得)

NHK「戦争証言」プロジェクト (2009a). 証言記録 兵士たちの戦争1 日本放送出版協会

NHK「戦争証言」プロジェクト (2009b). 証言記録 兵士たちの戦争2 日本放送出版協会

NHK「戦争証言」プロジェクト (2009c). 証言記録 兵士たちの戦争3 日本放送出版協会

NHK「戦争証言」プロジェクト (2009d). 証言記録 兵士たちの戦争4 日本放送出版協会

MacNair, R. M. (2002). *Perpetration-induced traumatic stress: the psychological consequences of killing* Westport, CT: Praeger

末田耕一 (2006). 東京大空襲被災と広島原子爆弾被爆の両方を経験し複雑性外傷後ストレス障害 (complex PTSD) を呈した1例 広島医学, 59(11), 814-830.

- 末田耕一(2007). 元帝国陸軍兵士が複雑性外傷後ストレス障害(complex PTSD)を呈した1例 広島医学, **60(3)**, 193-203.
- 吉川麻衣子(2003). 戦争体験からの回復過程に影響を及ぼす要因に関する探索的研究—沖縄県高齢者の生活史調査と調査研究を通して 研究助成論文集, **39**, 131-140.
- 吉川麻衣子・田中寛二(2004). 沖縄県の高齢者を対象とした戦争体験の回想に関する基礎的研究 心理学研究, **75(3)**, 269-274.